みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　12月　24日　　NO.23

産業革命

昔、中学校の社会科の教員だったこともあり、今回は産業革命についてお話ししたいと思います。

事の起こりは、17世紀末のイギリスから。イギリスは伝統的に毛織物が盛んで各地でギットンバッタン手織りの機織り機を動かしていました。そこへ、ジョン・ケイという人が「飛び杼(ひ)」というものを開発します。この飛び杼の導入で機織りのスピ－ドが大幅アップ。ここから機織り機や紡績機(糸をつむぐ機械)が改良につぐ改良が進みます。折しもイギリスはインドを植民地にして毛織物の「毛」に代わる綿織物の「綿」が安く大量に入手できたのです。

気が付けば機械の改良は、蒸気でモノを動かす、いわゆる「蒸気機関」の登場になりました。馬車は機関車に代わりました。ボートも蒸気で動き人間は疲れなしです。

蒸気は、石炭を燃やすことで生み出されました。石炭は黒いダイヤとも呼ばれ時代の中心に。

これが最初の産業革命です。

時代は進んで第一次世界大戦。産業革命に成功したヨ－ロッパの国同士が戦いました。その戦争の最初に恐れられたのは、機関銃。一つ引き金を押すだけで自動的に大量に弾が飛んできます。これを避けるために塹壕とよばれる地下道を掘り進めました。この地下道を突破するために生まれたのが戦車。戦争の最後には、飛行機も登場しました。そして、機械を動かす動力が石油に代わり、アメリカを中心とした自動車産業が世界を席巻しはじめました。これが2回目の産業革命。

そして、間もなく終わろうとしている2020年現在、世界は第四次産業革命のなかにあるといわれています。

「IoT」や「AI」や「ブロックチェ－ン」など。何のことかは、一度調べてみてください。

日本は、第二次産業革命の波に乗って、途中第二次世界大戦での敗戦はあったものの「ものづくり」においては、世界の主役になっていったのでした。すべては、「ものづくり」のために組織を整えました。教育も整備しました。

先日90歳で亡くなられたエズラ・ヴ－ゲルさんの著書「ジャパン　アズ　ナンバ－ワン」では、日本人の素晴らしさが書かれていて、バブル経済の前の勢いのある「ものづくり」大国の栄光が読み取れます。本が書かれたのは、1979年。昭和54年。まさに、世界の舞台に日本が昇っていく時代でした。

ところが、デジタル化において世界各国からかなり遅れた国になっていることが、このコロナ禍ではっきりとしました。

第四次産業革命中という研究者がいるなか、日本はその流れに乗れていません。

もう「ものづくり」の国ではないのです。

過去の栄光にしがみついてはいけないのです。

「年功序列制」、「終身雇用制」、「偏差値別大学序列」など今までの常識にしがみついている企業や組織は時代から淘汰されていくのが、実は産業革命なのです。

機関車が走って馭者(馬車を操る人)はいなくなりました。自動車が走って馬は動物園か競馬場にいる存在に変わりました。自宅にお風呂が備え付けられて、町の銭湯は一軒ずつ無くなっていきました。

あるアメリカの大学教授の言葉。

「成功という暴君が、企業を過去の囚われの身にする」。

今の子どもたちが社会で活躍し始めるその日、世界や日本はどんな姿に変わっているのでしょうか。

想像すると楽しくもあり、悲しくもあり、恐ろしくもなります。

あっ、前回の生駒の話の続き、忘れてました。